

「オズボーン・コレクション」を訪ねて

津 島 克 子

新しい世紀の夜明けをカナダ最大の文化都市トロントで迎えた。日中でも平均気温マイナス15度前後の、この寒帯の都市では、常に空気がびんと張り詰めて、冬の寒さに一種の透徹した純粹さが感じられる。雪も降るが、細かい粉末のような雪で、手に握ろうとしてもさらさらと指先からこぼれ落ちてしまう。晴れた日には、空気中の水分が氷の粒になってきらきらと輝く現象——いわゆるダイヤモンド・ダストだろうか——を見ることができて、非常に美しかった。

今回トロントに滞在する間、是非とも訪れたい場所がひとつあった。児童文学書の宝庫として世界的にその名を知られる「オズボーン・コレクション」(The Osborne Collection of Early Children's Books)である。しかし、トロントに到着して数日後に友人と車で出かけ、車の中で地図を広げて、首をかしげた。トロントの市街地図に、その名の建物が見当たらないのである。市内の要所要所に置かれている観光案内のパンフレット等をのぞいてみても、「オズボーン・コレクション」の手がかりとなるような名は発見できなかった。それまでこれは、一種の美術館かギャラリーのようなもので、観光名所のひとつくらいにはなっているのだろうと漠然と考えてはいたが、その予想は見事に外れた。仕方なく日を改めて出直すことにしたのだが、帰ってから調べてやっと、これがトロント公共図書館(Toronto Public Library)の分館の一角を占めていることがわかった。

トロントは実に図書館の多い街である。トロント自体広大な都市では

あるが、その面積と人口に対する図書館数の比率の高さは、世界でも類を見ないのではないだろうか。現在のトロント市は、それまでのトロント、ヨーク、ノース・ヨーク、イースト・ヨーク、エトピコ、スカボローの6都市が合併した街で（1998年1月1日に併合）、面積632平方キロメートル、人口は238万人だが、そこに98の図書館がある。この中で、かつてのトロント市であった市街区、およそ100平方キロメートルで60万人以上の人口が集中している地域に、30以上の図書館が点在している。当短期大学が建っている茅ヶ崎市は面積35平方キロ、人口22万人で、割合からいえばどちらもトロント市街のちょうど3分の1だが、図書館は本館と分館の2つしかない。これはあまり比較になる話とは言えないが、トロントの図書館の多さは想像できるであろう。

これらの図書館の中核となっているのが、トロント参考図書館(Tronto Reference Library)、通称メトロ・トロント図書館である。高級ブランドショップが立ち並ぶハイブローなショッピング通り、ヨークヴィルにあり、地下鉄のプロア・ヤング駅を降りて地上に出ると程なく、アートセンターかコンサートホールと見まがう、このモダンな建造物に目を引かれることになる。その外観を裏切らず、確かにここは、図書的な資料以外にも、音楽や美術関係の豊富な資料で溢れている。また、シャーロック・ホームズで知られるアーサー・コナン・ドイルのコレクションがあるのも興味深いが、今回は時間の関係で見ることができず、大変残念だった。

トロント公共図書館の様々なコレクションの中でも、もっとも有名な「オズボーン・コレクション」が置かれているのは、市街の北東、カレッジ・ストリート239番地に位置するリリアン・H・スミス分館である。市電の走るストリートをはさんで正面にはトロント大学のキャンパスがあり、英国風の威厳ある校舎が建ち並んでいる。その隣には緑濃いクイーンズ・パークが広がり、中央にロマネスク様式のオンタリオ州議事堂が

そびえ、更に周囲には、ロイヤル・オンタリオ博物館やジョージ・ガーディナー陶磁器美術館等もあって、一帯には重厚でアカデミックかつ文化的で落ち着いた雰囲気があり、この一大移民都市の歴史と伝統を最も濃厚に漂わせた区域となっている。そのような周囲の光景に目を奪われていると、リリアン・H・スミス分館は、見過ごしてしまうほどの慎ましい建物である。全体はベージュ色の四階建てのビルだが、アーチ型になった正面はあたかもトンネルの入り口を思わせ、そのほの暗い奥に木枠のガラスドアがある作りは、決して開放的とは言えず、ほとんどの人はこの前を通っても図書館とは気づかないかも知れない。もっとも、その入り口の左右には一対のブロンズ像が置かれていて、ここを図書館と知らない通行人も、物珍しげに奥の扉をのぞきこんでしまうだろう（図版1）。ブロンズ像はギリシャ神話でなじみ深いグリフォンだが、向かって左の像の顔はライオンになっているのが不思議な気がした（図版2）。グリフォンは胴体はライオンだが頭部はワシのはずで、右側は確かに真正銘のグリフォンである（図版3）。分館に入って係りの人に訊くと、本当に左側の像の顔はライオンでしたか？と首をかしげられた。毎日出入りしていると案外気づかないもので・・・と、言っていたが、確かにそういうものかも知れない。それでもさすがに、ここにグリフォン像のある由来は知っていた。モーリス・センダク（Maurice Sendak）というアメリカの絵本作家がグリフォンの絵本を書いていて、その絵をこの分館のシンボルマークとして採用したそうだ。建物の入り口のグリフォンは狍犬のように鎮座しているが、館内のあちこちに見られるシンボルマークのグリフォンの方は、表紙に「オズボーン・コレクション」と記された本を広げて読んでいる（図版4）。また、この分館で発行されているニュース・レターも「グリフォン」という名称だ。今回配布されていた「グリフォン」紙の第1面は、近年、世界的なベストセラーとなったファンタジー「ハリー・ポッターと賢者の石」の作者J・K・ローリングが

トロントで朗読会を行う記事でうめられていた。この収益の半分は「オズボーン・コレクション」のデジタル化計画のために寄付されるそうである。

ここで「オズボーン・コレクション」について、そのあらましを記しておきたい。1890年にイギリスで、郵便配達夫を父として生まれたエドガー・オズボーン (Edgar Osborne) は、小学校を卒業した後、独学で図書館員の資格を取り、1923年にダービーシャー州立図書館の館長となった。館長と言っても他の館員は2人だけという小さな図書館だったのである。彼は1954年に退職するまで、ここに勤務し、特に児童図書の収集に努めた。オズボーンの児童図書に対するこだわりは、彼が生来独学タイプの勉強家であって、子供の頃自分を教え育ててくれた本に並々ならぬ愛着があったことを考えれば理解できるであろう。加えて、彼が妻として選んだ女性、メープルも、児童図書収集という人生の目的を共にできる人物だったのであり、これが彼にとっても、コレクションにとっても実に幸いだった。

1934年、オズボーンはアメリカ図書館協会大会にイギリス代表として出席し、帰途、妻と共にトロントへ足を伸ばして、「少年少女の家」(Boys and Girls House)を訪ねた。「少年少女の家」はトロント公共図書館の分館の一つで、その名から想像できる通り児童図書館であり、トロント大学のキャンパスの西側を通過してカレッジ・ストリートに交差するセント・ジョージ・ストリートの40番地にあった。1922年にオープンして以来、リリアン・H・スミス (Lillian. H. Smith) の尽力によって、世界の児童図書館を先導し、児童図書館の一つの理想を体現してきた場と言って良い。

今日、児童文学の聖書として読み継がれている「児童文学論」(The Unreluctant Years)の著者、リリアン・H・スミスは1887年にオンタリオ州ロンドンで牧師の娘として生まれた。トロント大学に学んだ後、ア

メリカに渡ってカーネギー公共図書館の児童図書館員養成学校に進み、ここで児童図書館員の資格を得た。この資格を得たのはカナダ人としては彼女が最初だった。1910年、スミスはニューヨーク公共図書館の児童部に勤め始めたが、その頃、ちょうど近代化を推し進める最中で、その一環として児童部の開設が予定されていたトロント公共図書館から、その才を請われ、2年後の1912年に故国カナダへ戻った。当時はまだ中央図書館の片隅に置かれていたに過ぎなかった児童部で、スミスは蔵書の整理拡充はもちろん、施設の充実、展示会やストーリーテリングなどの集会の開催、館員の育成等に真摯な情熱を燃やした。その甲斐あってか、10年後には、中央図書館のすぐ隣にあった2階建ての古い屋敷を買い取り、内部を改造して児童図書館をそこで開設するまでに至った。児童図書のみで独立して開館するという、当時としては画期的なこの図書館は「少年少女の家」と呼ばれたのである。

「少年少女の家」は、まるでそれ自体古い絵本の中に描かれていそうなヴィクトリア朝風の家であったが、40年あまり経つと、老朽化が進んで天井が落ちるといった事態にもなった。そのため、この屋敷は取り壊され、近代的なビルに生まれ変わった。1964年、スミスが77才、日本風と言えば喜寿の年の出来事であった。ちなみに彼女の「児童文学論」の邦訳が出版されたのも、この年である。生涯を独身で通したスミスは——というより児童図書を一生の伴侶として過ごし、「少年少女の家」を我が子のようにして育て上げたスミスは、1983年、その生涯を終えた。それから10年後、「少年少女の家」も閉館された。スミスという偉大な指導者を失ったことはもちろん、経済的な問題や、時代の流れにより、子供達の興味の主体が本よりも映像やパソコンを用いたものの方に移り変わったことが、「家」の存続に否定的な影響を及ぼしたのであろう。

1995年、児童図書館ではないのだが、一応「少年少女の家」を後継する形で、カレッジ・ストリートに新しい分館が建てられた。これがリリ

アン・H・スミス分館と名付けられた由来はもう説明の要もないだろう。かつて「少年少女の家」の宝であった「オズボーン・コレクション」も勿論、このリリアン・H・スミス分館に収められている。

話をオズボーンの方へ戻そう。オズボーンが「少年少女の家」を訪れたのは、「家」ができて10年余り後のことである。当時彼は44才、スミスは47才であった。その頃スミスが収集していた古典的な児童図書は100冊ほどであったというが、イギリス文化が流入してきたのは18世紀末からという歴史の浅いこの地域で、そのような古書を集めるのは至難の業であっただろう。オズボーン夫妻は「少年少女の家」に児童図書館の理想を見だし、将来自分たちのコレクションをここに寄贈することにした。1949年、夫人のメープルが亡くなると、オズボーンは15年前のこの思いを実行し、夫人の遺志も果たすことにした。彼の収集した1566年から1910年までの約2000冊の図書は、コレクションの保管と拡充、一般への公開、専門スタッフの配属と目録の作成出版という条件と共に、「少年少女の家」に寄贈された。当時イギリスでは、貴重な図書の海外流出に反対の声が強かったという。しかし図書の「家」がここ以外には見つからなかったのも事実だったのだろう。コレクションが1910年のものまでに限られているのは、これがオズボーンの成人した年だからである。この年以降の児童図書については1962年から「リリアン・H・スミス・コレクション」として収集されている。500年間以上にわたる1万5千冊を越えるふたつのコレクションを、その後もエドガー・オズボーンは愛情深く見守った。そして、再婚したカーティス夫人と共に何度も「少年少女の家」を訪れてはコレクションの発展に寄与したが、1978年、スミスに先んじて、この世を去った。

オズボーンの生前にトロント公共図書館では、コレクションに関する「友の会」を設置し、会員には年に1冊、コレクションからの復刻本を贈るという制度を設けた。その一方で、コレクションから精選した35冊

をまとめて復刻し市販するという、世界でも画期的な出版事業が日本で実行された。それがほるぷ出版による「復刻 世界の絵本館—オズボーン・コレクション—」であり、日本で特に児童文学に関わる者でなくとも、オズボーンの名を耳にした者が多いとすれば、それは、この優れた出版企画によるものであろう。出版の際、原書はコレクションの室長が自ら手荷物として日本へ運び込み、高額の保険が掛けられたのはもちろんのこと、作業中以外は銀行の金庫へ預けられたそうである。借り出しのできる期間が半年と限定されていたことと、ほとんど18、9世紀の手作業印刷と製本による原書の形態を忠実に再現するために、復刻に当たっては、それぞれの本の特性に合わせた印刷所と製本所が選ばれた。1セット、35冊の制作のために、8カ所の印刷所と5カ所の製本所から、本ごとに別々に担当を指定するということは、出版史上でも稀な出来事ではなかったかと思う。

初代の「少年少女の家」と改装された2代目の「家」は、今日では写真や絵でしか知ることができないが、それらを見て想像する限りでは、今回訪れたリリアン・H・スミス分館は、これまでのふたつの「家」の面影を共に宿している。現代的なビルではあるのだが、初代のヴィクトリア風の屋根窓のある形と、2代目の壁面が煉瓦づくりの外観を持った、瀟洒な建物なのである。中に入ると、まず4階までの円形の吹き抜けがあって、その周囲に螺旋状の階段があるのが目に付く。西欧の図書館によく見られる造りだ。1階は児童図書の部屋で、書架の間には子供用の低いテーブルと椅子が置かれているのが印象的である。入ってすぐ右手はフランス語の本と中国語の本のコーナーになっているが、これは、カナダでフランス語が併用され、また、この分館の近くには大きな中華街があることを考えれば自然なレイアウトと言える。2階には大人用の本があり、3階は電子部門で、パソコン、電子図書及びSF関係の本が置かれている。そして4階が「オズボーン・コレクション」である。図書館

という場自体、もともと静粛を旨とするところであり、どの階も騒がしいわけではないのだが、それでも4階まで昇ってくるとさすがに、その静寂に次元の違いを感じる。3階までの微かな話し声や足音や本をめくる音などが時折響いてくるのは、はるか下界の物音のように聞こえ、4階だけが別の時間と空間に属しているように錯覚してしまう。吹き抜けから眺め下ろす景色も、まるで別の世界から、遠い地上を見下ろすのに似ている(図版5)。

3階までと隔離したこのフロアで、「オズボーン・コレクション」はさらに、大きなガラスのドアで仕切られた1室にある。しかし、残念なことに、ただここへ入っただけでは思い描いていたようなコレクションを目にすることはできなかった。コレクション室は、入って右側がショーケースの並ぶ展示コーナーで左が閲覧室となっており、この時の展示は「古いイギリスと新しいカナダ」というタイトルで、イギリスとカナダのほとんど名も聞いたことのないような児童書が数十冊展示されているだけだった。他に本と言えば、先述したほるぷ出版の復刻版が並べられているくらいのものであった。かつて「少年少女の家」ではコレクション・ルームは半地下にあり、壁面に並べられた書棚に収蔵本がぎっしりと詰まっていたそうである。もちろん、ガラスの扉は施錠されていて、館員に申し出なければ本に触れることはできなかったが、当時は見学のためにガイド付きのツアーもあったというのだから、美術品のように貴重な多くの本の背表紙だけでも一斉に眺め回すことはさして困難ではなかったはずだ。リリアン・H・スミス分館では、コレクションルームのスペースから言っても、そのような展示は不可能になったと考えられるし、逆に初めから、常時展示して、コレクションの数々をたやすく一般の人の目にふれさせることは、もはや考えに入れなくなった、と感じられた。

カウンターの館員に尋ねてみると、希望の本があれば何でも持ってきて見せます、見たいのは何という本ですか、と、コレクションの分厚い

目録を指さして言われた。あまり急に言われたので困ってしまい逆に、ここで一番貴重なもの、見せたいような本は何ですかと聞いてみた。すると館員はにっこり笑って、ちょっと待っていなさいと、奥の部屋へ入った。ほどなく数冊の本を抱えて出てくると、閲覧室へ来るように言った。最初に見せてくれたのが「イソップ物語」(Aesopus moralatus)で14世紀のものであり、コレクションの中でも最古の本だという。7世紀も前の書物というのは見ているだけでも、頭の中がしんとしてくる。挿し絵も入っていて、初めの頁には鶏の絵が付いているのだが、その鶏冠とさかの赤色が不思議に生き生きとして見えた。次に18世紀頃のホーン・ブック(Horn Book)というのを幾つか見せてくれた。これは動物の牙や角を平らに加工して、アルファベット等を記し、子供達が文字を習い覚えるのに用いたものだ。小型の羽子板のような形だが、19世紀以降、紙を用いて作られるようになっても「ホーン・ブック」の名で呼ばれ続けたのである。1901年刊のラング(Lang)のヴァイオレット・フェアリー・ブック(Violet Fairy Book)は大変に美しい本だった。その名の通り、すみれ色の地に金色で妖精が描かれた表紙は、そのまま額に入れて飾りたいほど美的な感性に溢れたデザインで思わずため息が出た。

その他にも Chart-bookやWriting-Sheet等、いわゆる「本」という以前の形態の児童書も目にする事ができた。このようにして係りの人に説明してもらったのは本当に短い時間であり、コレクションの片鱗に触れただけだったが、それだけでもここが、まさしく児童文学の歴史そのものを収めた、児童書の博物館であり美術館であることは十分に理解できた。しかしながら、そのようなコレクションの貴重さが強く実感されればされるほど、収蔵図書が博物館や美術館のような形で展示されていないことがとても残念に感じられた。なるほど、館員に頼めば、どんな本でも実物を、ガラス越しではなしに目にする事ができ、ページをめくり読むこともできる。しかし、予め知っていて探し求めているもの

を目にできる喜びと、思いもかけぬ未知のものに出会える喜びとは、全く違うものである。コレクションの目録が充実した内容のものであることに疑いの余地はないが、目録を介さずにはコレクションに触れることができないというのは、このジャンルに不案内な者にとっては、利用の機会がほとんどないというに等しい。「オズボーン・コレクション」がリリアン・H・スミス分館の収蔵室で普段は人目に触れることもなく保管されるようになったのは、専門の研究者のためにはそれでも十分用が足りると判断されてのことだろう。しかし、このように書物がテレビやパソコンの陰に追いやられている時代の子供達にこそ、書物という形でしか表現できない美しさや、書物による読書でしか体験できない世界があることを、そしてそのような書物の文化が500年以上も前から脈々と続いてきたことを、知って欲しいと思う。それまで復刻版でしか知らなかった「オズボーン・コレクション」の実物を目にするのできた大きな喜びと共に、ある種の深い寂しさを感じながら、私はリリアン・H・スミス分館を後にした。外は既に夕闇に閉ざされ、入り口のグリフォンは黒いシルエットとなって、冷たく凍りついたまま暗い空を見つめているようだった。

参考図書

桂 宥子著「理想の児童図書館を求めて」(中央新書, 1997年)

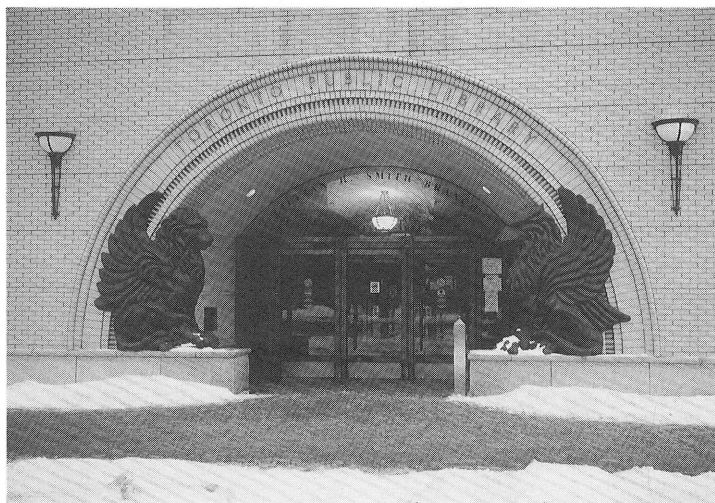
複製 世界の絵本館 — オズボーン・コレクション — (ほるぷ出版, 1979年)

参考資料

The Gryphon Autumn 2000

— The Newsletter of the Friends of the Osborne and Lillian H. Smith Collections —

図版 1



図版 2



図版 3



図版 4



図版 5

